

Title	<翻訳>ヘルベルト・レーデラー著「思考の場 ウィーンのカフェハウス」
Author(s)	ペピン, ハンス ヨアヒム
Editor(s)	
Citation	大阪府立大学高等教育推進機構（外国語教育センター）論文集 言語と文化. 17, p.77-96
Issue Date	2018-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15747">http://hdl.handle.net/10466/15747</a>
Rights	

## 思考の場

ウィーンのカフェハウス

ヘルベルト・レーデラー著

ペピン ハンス ヨアヒム訳

以下の翻訳はHerbert Lederer, *The Vienna Coffee House: History and Cultural Significance*, in: Rittner, Leona, W. Scott Haine and Jackson, Jeffrey H. (Eds.): *The Thinking Space. The Café as a Cultural Institution in Paris, Italy and Vienna*, Routledge London - New York 2016, pp. 25-33によるものです。著者と出版社は翻訳を快く許可してくださいました。またウィーン大学名誉教授ギュンター・ペルトナー氏はわざわざ前書きをお寄せくださいました。記して心からお礼を申し上げます。

### 凡例

- ※カタカナ表記は、なるべくドイツ語、フランス語、イタリア語の発音に近づけた。
- ※人名、コーヒーに関するもの、ウィーン固有のものに関しては、カタカナ表記の上、注でドイツ語の原語を示した。
- ※原語でイタリックになっているものには訳に傍点を付した。
- ※原著での引用文は「 」でくくった。
- ※著書は『 』でくくった。
- ※訳注に関しては、主として以下のウェブサイトを参照した。

WIKIPEDIA

Glosbe - 多言語オンライン辞書 (<https://ja.glosbe.com/>)

UCCコーヒーの歴史 (<http://www.ucc.co.jp/enjoy/encyclopedia/history/>)

WIEN GESCHICHTE WIKI

([https://www.wien.gv.at/wiki/index.php/Wien\\_Geschichte\\_Wiki](https://www.wien.gv.at/wiki/index.php/Wien_Geschichte_Wiki))

Wien.at (<https://www.wien.gv.at/>)

しかし、引用する際には、随時可能な範囲で編集し直した。

※原注はアラビア数字、訳注はローマ数字の通し番号で表記した。

※原注、訳注共に巻末に一括して表示した。

日本の読者のために  
ウィーン大学名誉教授 ギュンター・ペルトナー

ウィーンが音楽の都であることは世界的に知られていますが、17世紀末にまでさかのぼるカフェ文化の伝統はそれほど知られてはおりません。カフェハウスは多くの芸術家や知識人の出会いの場でありました。なるほど、19世紀末もしくは20世紀初頭に最盛期を迎えたウィーンのカフェハウスの賑わいは今では過ぎ去ってしまいましたが、カフェハウスはその魅力を少しも失ってはいません。あらゆる知識層の人々が相変わらず今でもカフェハウスに姿を見せています。小説家シュテファン・ツヴァイクの有名な金言に、カフェハウスはたった一杯の安いコーヒーで誰もが受け入れられる民主的な集いの場である、というものがありますが、この金言の妥当性は少しも失われてはおりません。今でもやはりカフェハウスは、知的交換の場であり、学びの場であり、そして雑談や休息の場なのです。老若、そして国の内外を問わず、多くの客がカフェハウスに集っています。本書の読者の中から一人でもウィーンを訪問する人が出てくれて、ウィーンのカフェハウスでくつろいだ雰囲気を楽しみ、ウィーン訪問を良き思い出として残してくれるようなことがあれば、それはどんなに素晴らしいことでしょう。私がこのような願いを述べさせていただくのは、私自身、日本の友人からすでに数多くの心温かいもてなしを経験させていただいているからこそなのです。最後に、ペピン教授と彼の仲間の皆様に感謝申し上げます。皆様のおかげで、この翻訳が異文化交流に大きな貢献を果たすことになるでしょう。

ウィーンにて

## ウィーンのカフェハウス 歴史とその意義

「ウィーンの人々にとって、カフェハウスはなくてはならない施設である」、とルートヴィヒ・プラコルプ<sup>i</sup>はその著、『カフェハウス』のあとがきで言っている。<sup>1</sup> 彼は、さらに続けてこう言っている、「生きていこうと思うなら、人は家がなくても生きていける（とどのつまりは、ホテルがあるさ）、オフィスがなくても生きていける（一体どうして働かなければいけないんだ）、妻がいなくても（もちろん、他にも女性はいるじゃないか）、何だかんだ言っても、結局のところ、本当に困った時でも、金なんかなくても生きていける（一体何のためにカフェハウスにオーバーがいるのだ）。けれども、カフェハウスなしでは、生きてはいけない。カフェハウスというものは、今言った全てを代用できるのだから」。<sup>2</sup>

本来、ウィーンのカフェハウスは、ロンドンのクラブやパリのサロンと同じ役割を果たしている。けれども、そこには大きな違いがある。サロンやクラブでは社交礼儀作法を決めているルールやしきたりが幅を利かせている。それに対して、カフェハウスでは一人でいようと友達と一緒にであろうと、したいようにしていられる。責任や義務から全く解放されている。サロンとは違い、会話を強いられることもなければ、クラブとも違って、会費もない。

マルセル・ブリオン<sup>ii</sup>は次のように述べている。

「それぞれの国のカフェハウスの特徴に基づいて、その国の首都を興味深く分析することができるかもしれないし、同時に、一杯のコーヒーがそれぞれの民族にとって何を意味するのかという問いを探求すれば、その民族の心理、習慣、情緒に関する重要な情報源を手に入れることになるだろう」。(I,49)

すべてのカフェがそうであるように、ウィーンのカフェハウスも客に対して一人でいたいか他の人と一緒にいたいかを選択する余地を与えてくれる。しかしウィーンのカフェハウスは客にそれ以上のことを与えてくれる。つまり、ケルナー<sup>iii</sup>はあなたをビジネスマンと見て取るや、ヘル・ディレクター<sup>iv</sup>と呼びかけてくるし、若いインテリと見て取るや、ヘル・ドクター<sup>v</sup>と呼びかけてくれるし、年配のインテリと見て取るや、ヘル・プロフェッサー<sup>vi</sup>と呼びかけてくれる。(ヘル・バローン<sup>vii</sup>は、超保守的な高級レストランの場合は別として、いささか古臭い) あなたが三度も訪問すれば、ケルナーはあなたの名前を知りようになり、あなたのお気に入りの席へと案内してくれる。それからケルナーはあなたに一杯のコーヒーを持ってきてくれるわけだが、そのコーヒーたるや、アインシュペンナー<sup>viii</sup>にしますか、メランジェ<sup>ix</sup>にしますか、モッカ<sup>x</sup>にしますか、カプツィーナ<sup>xi</sup>にしますか、アイネ・シャーレ・ゴルト<sup>xii</sup>にしますか、アイネ・タッセ・ヌスブラウン<sup>xiii</sup>にしますか、といったようにウツトリするような名前をもった、頭がくらくらするほどの選択肢の中から選ばれたものであり、しかもすべてのコーヒーにはシュラク<sup>xiv</sup>をのせますか、のせませんかとするの

である。一杯のコーヒーだけではない、ケルナーは山のように積まれた新聞や雑誌を持ってきてくれるし、たとえあなたが別に注文しなくても、グラスにはいつもきちんと水を注いでくれている。そしてあなたは日長一日、夜遅くまで、しまいには店が閉まるまで、居続けることができるのである。

ウィーンの人々にとって、日に三度シュタムカフェ<sup>xv</sup>を訪れることは、全くの日常である。朝には、コーヒーと一緒にゼンメル<sup>xvi</sup>やキプフェル<sup>xvii</sup>の朝食をとり、午後の休憩、これをウィーンの人々は<sup>xviii</sup>ヤウゼと呼んでいるのだが、この時には、ケーキやトルテ<sup>xix</sup>、世界的に有名なウィーンの焼き菓子をほんの少し食し、夕方には長時間カフェハウスで過ごすといったように。もう200年以上も続くこのような日々の儀式がなければ、ウィーンはウィーンではないだろう。ヘルマン・ケステンがかつて言ったように、ウィーンは「乙女と旅人の町、カフェハウスとフィュトン<sup>xx</sup>と精神分析家の町、歌と音楽の町」なのである。<sup>3</sup>

言うまでもないことだが、カフェハウスはウィーンで考え出されたわけではない。中世より、中東の文化の中で愛されてきた施設である。ヨーロッパではカフェハウスは、ウィーンに紹介されるよりも前に、すでにベネチア、マルセイユ、ロンドンにあった。しかし、ウィーンの人々はカフェハウスに他所では見られない独特のエレガントでシックなセンスを与えた。プラコルプは1845年の出典不詳の文献を引用して、「カフェハウスはとにかく存在しなければならない。カフェハウスは我々にとっては社交的な居心地のいいものの一部分である・・・カフェハウスは我々の生活の一部分であり、それは無くてはならないものなのだ」と言っている。<sup>4</sup>

ここでは、コーヒーとウィーン前（紀元前vor Christus = BCではなくて、ウィーン前vor Wien = BV）のカフェハウスについて手短かに紹介したい。カフェという言葉（それぞれの言語によってその書き方は違っているが）は、おそらくエチオピアのカッファ<sup>xxi</sup>という地名に由来していると思われる。カッファにはブン<sup>xxii</sup>という名の植物があり、思うに西暦800年よりも以前に、ブンは北アフリカやアラビアの国々に伝わっていたと考えられる。中世のある伝説によれば、羊がブンの実を食べた後、興奮状態になるのに気が付いた羊飼いたちが、この植物の持つ刺激作用を偶然発見したということである。この伝説が真実であるかどうかは別として、コーヒーは元来その実を生そのまま、あるいはローストした後、つぶしたり、こすったりして粉にして嚙むものであったということは事実である。ピエール・デュモンというスイスのプロテスタント牧師の考えでは、聖書にエサウは家督と引き換えにレンズ豆のスープを得たと書かれているが、このどろどろの粥状のものは、むしろ、コーヒーではなかったかということである。

初期アラビアの医師、ラーゼス<sup>xxiii</sup>はガーレン<sup>xxiv</sup>とヒポクラテスの説の信奉者であった。彼自身多くの医学書を著し、紀元800年頃<sup>xxv</sup>に書いた『アル・ハイウィ』<sup>xxvi</sup>の中でコーヒーの持つ効能について初めて言及した。イラン、エジプト、トルコでは陶器製の壺を用いてコーヒーを豆から抽出し飲むという飲み方が発見されたが、こ

のようなコーヒー専用の壺はほぼ1350年代に由来する。公共のカフェはすでに1500年頃にはメッカに存在していたに違いない。というのも、メッカの市長であったケア・ベイは公共の秩序が乱されたため、1524年にカフェの閉鎖を命じていた。しかし、次の市長は特別の許可のもとに、カフェの再開を認めた。

スレイマン大帝<sup>xxvii</sup>時代の1551年<sup>xxviii</sup>にコンスタンチノーブルに初めてカフェが開かれた。その後、豪華絢爛なカフェハウスは全イスラム諸国へと広がり、コーヒーはイスラムのワインとして広く知られるようになった。

コーヒーの知識がヨーロッパ中に広まったのは、中近東から故郷へと帰ってきたエルサレムへの巡礼者たちによる。ドイツのアウグスブルク出身の医師であり植物学者でもあったレオンハルト・ラウヴォルフ<sup>xxix</sup>は、書物の中でこの飲み物に注目した最初の人であった。彼の著書『最近の中近東見聞録』<sup>xxx</sup>（ラウニンゲン 1582）では次のように書かれている。

「もしも何か食べたいとか、何か飲みたいという思いがあれば、普通は、床や絨毯の上にとともに座って食事をするための店が開いている。飲み物はたくさんあるが、その中には大評判で、カウベ<sup>xxxi</sup>と呼ばれる良い飲み物がある。カウベはインキのように黒くて、病気、とりわけ胃の病に、大変よく効く。人々はカウベを土製の壺か陶製の器で飲むのだが、それはかろうじて耐えられるほどの大変な熱さである」。<sup>5</sup>

コーヒーの効能は、コーヒー(カフェイン)を含む食品のためだけに捧げられたヨーロッパ最古の書物の中でも強調されている。その書物とは、フィリップ・ジルベスター・デュフォーの、『コーヒーとお茶とチョコレートに関する新しい興味ある論考』<sup>xxxii</sup>である。<sup>6</sup>

1585年にジャンフランチェスコ・モロシーニ<sup>xxxiii</sup>はベネチア評議会に、トルコ人はカヴェ<sup>xxxiv</sup>という豆から抽出した黒い水をいつも飲んでいることを報告した。<sup>7</sup> 1616年にピエトロ・デッラ・ヴァッレ<sup>xxxv</sup>によって、とうとう、ベネチアにコーヒーが紹介された。1750年のカルロ・ゴルドーニ<sup>xxxvi</sup>のコメディ『珈琲店』はベネチアのあるカフェハウスを舞台にしているが、それはおそらく、フローリアン<sup>xxxvii</sup>であろう。

ピーター・ファン・デン・ブローケ<sup>xxxviii</sup>によって、イエメンの港モッカからオランダへ、コーヒーがもたらされた。1664年に、デン・ハーグにオランダで初めてのカフェハウスができた。1650年頃に、アドリアーン・ファン・オスターデ<sup>xxxix</sup>はカフェの絵を描いているが、これは西ヨーロッパでおそらく初めてカフェを描写したものである。

フランス人の旅行家、ピエール・デ・ラ・ロック<sup>xl</sup>はレバノン、シリア、トルコ地域からマルセーユに帰郷した時、コーヒー豆だけではなく、コーヒーを淹れる時に使われる数々の小道具も持ち帰った。これらの小道具は、当時のフランスでは非常に珍しいものであった。<sup>8</sup>

コーヒーについてイギリスで最初に言及したものの一つは、ヴァージニア植民地の建設者、キャプテン・ジョン・スミス<sup>xli</sup>の著書『旅と冒険』のうちにある。この著書

は1603年<sup>xliii</sup>に出版された。彼はトルコ人についてこう言っている、「彼らが好む飲料はコッフア<sup>xliiii</sup>と言ひ、コアヴァという名の木の実から作られる」と。<sup>9</sup> フランシス・ベーコン<sup>xliv</sup>は著書『シルヴィア・シルヴァルム』（1624年）の中で、以下のように書いている。

「トルコにはコッフアという飲み物があり、同じ名を持つ木の実から作られる。タールのように黒くて、強い芳香があるが、それはハーブの香りではない。この木の実をパウダー状に押しつぶし、水を注ぎ、可能な限り熱くして飲む。カフェハウスでトルコ人はコーヒーを前に座り、食事をする。そのカフェハウスはイギリスのパブに似ていて、人が多く集まる。この飲料は、脳や心を落ち着かせ、消化を助ける」と。<sup>10</sup>

イギリスで最初にコーヒーが飲まれたのは、クレタからオックスフォードに留学していたナタニエル・コノピウスによる。それは、1637年のことであった。1650年にはロンドンにジェイコブスという名の男によって最初のカフェハウスがオープンした。<sup>xlv</sup> このカフェハウスは大変有名で、サミュエル・ピープス<sup>xlvi</sup>が自分の日記の中で言及しているほどであった。彼は日記の中で「ある日、私がトーマス・セント・サーフ<sup>xlvii</sup>作のコメディ、*Tarugo's Wiles, or The Coffee House* <sup>xlviii</sup>の上演を見に行ったら、王チャールズ2世とヨーク公も列席しておられた。この時私が見たものは、実にバカバカしくて下品な作品であった」、と書いている。<sup>11</sup>

1670年頃には、イギリスから北ドイツへコーヒーが輸出された。1675年、ブランデンブルク選帝侯の宮廷で、コーヒー飲用が話題にされた。1679年、あるイギリス商人がハンブルクにカフェハウスを開いたが、全くはやらなかった。

一方、話は変わって、オスマン帝国は南東ヨーロッパへとさらに勢力を広げていった。1460年頃にはセルビア、ボスニアを、16世紀にはクリミア半島、モルドバ、トランシルバニア、そして遂にハンガリーまでも征服した。帝国の絶頂期は疑いもなく1529年の第一次ウィーン包囲の頃であるが、ウィーン包囲は不成功に終わった。無敵のイスラムと共に、コーヒー文化は広がっていった。1683年、再びトルコ軍は急遽守りを固めたウィーンの目前に迫っていた。こうして第2次ウィーン包囲が始まり、町の陥落は不可避に思えた。皇帝レオポルト I 世はウィーンから一旦逃げ出したが、神聖ローマ帝国の選帝侯達やポーランド王に反撃するよう促した。その時何が起きたかは、カール・フォン・ペーツ<sup>xlix</sup>によって、詳しく語られている。<sup>12</sup> それはゲオルク・フランツ・コルシツキー<sup>l</sup>の物語である。彼は、歴史的に実在したとはいえ、数多くの伝説に満ちた人物であり、ウィーン第4区には、彼の名譽を称えて、彼の名前の付いた通りまでもがある。本来の綴りはクルシツキ<sup>li</sup>である。彼はポーランド人の子孫であると自称してはいるが、おそらく、1650年頃に南ハンガリーの町、ソンボールで生まれたと思われる。ソンボールはセルビアとの国境に近く、従って、オスマンに支配されていた地域にあった。彼の父は確かにポーランド人であり、オスマンの戦争捕虜となって奴隷のような処遇を受けた。彼の母はセルビア出身の可能性が高い。ゲオルク・フランツは多くの言語の中で育った。ポーランド語、セルビア語、トルコ

語、そしてドイツ語に堪能であった。青年時代は通訳としてオーストリア商工会に属するオリエントカンパニーのベオグラード事務所で働いた。1670年代に彼はウィーンにやって来た。彼の名前が初めて現れたのは、彼にオリエンタル製品輸入の認可を与えた1678年7月6日夜ウィーン包囲が始まると、コルシツキーは自発的に兵役に志願し、勇敢に戦ったと言われている。敵の前線を突破して、皇軍に戦況を伝えることが必要になった時、ウィーン前線にいた皇軍の司令官、エルンスト・リューディガー・シュタルヘムブルク伯<sup>iii</sup>に伝令役として推薦された。コルシツキーはトルコ風の服に身を固め、トルコ軍と取引をするベオグラードのトルコ人商人と偽り、セルビア人、ゲオルク・ミハイロヴィッチの従僕として付き従った。コルシツキーは8月13日の夜10時頃ウィーンを脱出し、任務を成し遂げ、再び8月17日の早朝4時にウィーンに戻った。彼は、このような旅を更に3回した、と主張しているが、このことを証明する文書は存在しない。たとえその真偽がどうであれ、彼は戦況を伝えることに成功し、ポーランド王、ヤン・ソビエスキ<sup>iiii</sup>の援軍が到着して、9月12日にウィーン包囲網の撃破に貢献したということは疑いもない。

トルコ軍が逃走した後に、2万5千張のテント、1万頭の牡牛、5千頭のラクダ、10万個の穀物袋、その他に多くのコーヒー豆の袋が残された。救援軍はこの豆を見たこともなく、その豆で何を作ろうとするのか、知らなかった。コルシツキーは職務の褒賞として、ミハイロヴィッチと共にすでに受け取っていた2千グルデンに追加して、この袋を貰うことを強く要求し、彼の望みは聞き届けられた。

この後のウィーンにおけるコーヒーの歴史的展開は激しい論争的となっている。コルシツキーがウィーンにコーヒーを紹介したという主張はよくなされている。しかし、コーヒーがすでにならかなり以前からウィーンにあったということは、証明可能な事実である。つまり、1668年7月6日の皇室財政記録文書の一つの記述には、とりわけコーヒー20ポンドを輸入したベオグラード商人デメトリウス・ドマジー<sup>liv</sup>の名前が出てきているのである。しかし、実証できる限りでは、当時コーヒーは単に個人の家で飲まれていたにすぎず、おそらく露店で売られていたのであろう。1683年以前は、もっぱらコーヒーだけを出す飲み屋としてのコーヒー専門店の存在を証明することはできない。

コルシツキーはウィーンの街角でコーヒーの商売を始め、そこで彼は大きな盆にコーヒーポットとコーヒーカップを載せてコーヒーを提供した。この商売は彼が酒場でコーヒーを提供する許可を得た1685年9月11日まで続いた。この酒場は、最初は、シュテファン大聖堂<sup>lv</sup>の向かいのアウフ・デア・ハイデ<sup>lvi</sup>という名の建物の中にあった。コルシツキーは1686年3月2日にこの酒場を売却し、後にドームガッセ<sup>lvii</sup>と名称が変わるクライネシュレーラーシュトラッセ<sup>lviii</sup>にあるツム・ローテン・クロイツ<sup>lix</sup>という小さな料理旅館を買った。どうやら、この場所はカフェハウスの営業にはあまり向いていなかったらしく、コルシツキーは再びこの建物を売り払い、別の店を開業した。デイ・ブラウエ・フラッシュェ<sup>lx</sup>という名のこの店は当時シュロッセルガッセ<sup>lxi</sup>にあっ



たが、その場所は、現在のシュトック・イム・アイゼンプラッツ<sup>lxii</sup> 8番地である。コルシツキーは開店以後客をオリエンタル風の衣装で迎えた。1700年のウィーン市公文書にはそのカフェハウスは<最初の珈琲館>と記録されている。<sup>13</sup> コルシツキーは宮廷御用トルコ商人を自称していたらしいが、おそらく、勲章は授けられていたであろう。彼は、1692年2月19日に亡くなり、ザンクト・シュテファン墓地<sup>lxiii</sup>に埋葬された。彼に対する追慕は、ウィーンコーヒー商組合が所有する油彩画、そしてコルシツキーガッセ<sup>lxiv</sup>とファボリーテンシュトラッセ<sup>lxv</sup>が交差する街角にある1885年に作られた記念像に残されている。

カフェハウスの開設は直ちに皆がみんな大歓迎したわけではない。名も無い同時代の人は以下のように書いている。

「あの野蛮民族と講和が結ばれると、あいつ（コルシツキー）は俺たち素朴なドイツ人のためにウィーンの極上の水を加えてアジアのあの得体の知れない飲み物を作り始めた。飲み食いで一杯になった俺たちドイツ人の腹を少し楽にする・・・とかしないとか言ってな」。<sup>14</sup> 18世紀初頭の旅人は急速に普及していくカフェハウスの印象を次のように残してくれた。「ウィーンの街はカフェハウスであふれている。そこでは文筆家や新聞雑誌業界人そして読者が集ってきては、新聞を読み、その内容を論じ合うのが常態となっている」。<sup>15</sup>

しかし、1734年になっても依然として嬉しがらせる意見とは全く別の意見もあった。ある評論家は、匿名で次のように書いた。「今日のカフェハウスは、お金と引き換えに3つのつまらないものを売っているただの店以外の何物でもない。それはつまり、煙、ぬるま湯、嘘である」。<sup>16</sup> 喫煙はしばらくの間カフェハウス内では禁じられていたが、非喫煙者は明らかに少数派であったので、禁止令はすぐに廃止された。とはいえ、それは疑いもなくオーストリア政府がタバコの販売権を独占するためであった。どうであれ、女性の前では男性は喫煙を慎んだ。ある逸話によれば、メッテルニヒ侯爵夫人<sup>lxvi</sup>はある時一人の男性から次のように尋ねられた。「私の煙が奥様にご迷惑をおかけしてはおりませんか？」と。それに対して、侯爵夫人はこう応えたいらしい。「さあ、どうでしょうか・・・お答えできかねますわ。だって、わたくしの前で敢えてタバコをお吸いになる殿方は、今だかつて一人もいらっしゃいませんでしたもの」と。<sup>17</sup>

18世紀、カフェハウスにビリヤード台が設置されると、カフェハウス文化はさらに発展した。このような施設の中でも、最も人気があったのはカフェ・フーゲルマン<sup>lxvii</sup>である。カフェ・フーゲルマンは、当時は街外れであったレオポルトシュタット、現在はウィーン2区、と中心街とをつないでいる橋<sup>lxviii</sup>のたもとにあった。ここはブラーター<sup>lxix</sup>へ続く大通り沿いの理想的な場所であった。カフェの客は、川岸に沿って設えられた庭園用の椅子から、ドナウを行き来するボートやギリシャ風、あるいはトルコ風の衣服を着た船乗り、そして裸のまま水浴びする人々を見物することができた。<sup>18</sup>

フーゲルマン・ビリヤード・「アカデミー」は有名であった。フランツ・プファイファー<sup>19</sup>は次のように書いている。「人々は役者を見たくてブルク劇場へ行く。それと同じように、非常に優れたハスラーを見るためにフーゲルマンに行く」。1745年の警察の通達には、ビリヤード台は1階に限り設置を許可するとある。それは、ビリヤード台や、押し寄せた観客の重みで天井が抜け落ちるのを防ぐためであった。フーゲルマンの顧客の中には、詩人、音楽家、役者、画家、さらには実業家や相場師もいた。

人々がカフェハウスに魅せられたもう一つの新しさは、カフェハウスで音楽が演奏されるようになったことである。それはピアニスト、ヴァイオリニスト、声楽家がソロで行うこともあれば、小編成のアンサンブルやフルオーケストラが行うこともあった。

モーツァルトやベートーベンはアウガルテン・カフェ<sup>lxx</sup>でヨーゼフ・ランナーと彼のアンサンブルはパラダイスガルテル<sup>lxxi</sup>で演奏した。パラダイスガルテルは1760年にイタリア人、ピエトロ・コルティ<sup>lxxii</sup>によって現在のブルク劇場<sup>lxxiii</sup>の場所に作られた。ヨハン・シュトラウス楽団はシュタットパルク・カフェ<sup>lxxiv</sup>で聴衆を楽しませてくれた。

ミュージアム通りにあったカフェ・ヴェークフーバー<sup>lxxv</sup>では毎日コンサートが開かれた。また一週間に一度は「パラダイス・ナイト」や「東洋の歓喜」などというテーマ音楽祭が催された。ヴェークフーバーの常連客には有名脚本家のフェルディナント・ライムント<sup>lxxvi</sup>や女優のテレゼ・クロネスがいた。

マリアヒルファーシュトラッセ<sup>lxxvii</sup>にあったカフェ・シュヴェンダー<sup>lxxviii</sup>は、皇女ペレーラ・アルンシュタイン<sup>lxxix</sup>が借りていた畜舎の中でそれこそ質素に始まったが、その後カフェには自前のダンスホールと劇場を持ったレストランが付け加わり、劇場では活人画<sup>lxxx</sup>と呼ばれた上演がなされた。カフェ・シュヴェンダーは自前のオーケストラを持ち、ウィーンで最も人気のある娯楽の中心地として一般に通用していたが、ついには、1897年に閉店し、取り壊されることになった。

1839年頃には、カフェハウスはウィーンの市街地では約80軒、郊外では約50軒あった。これらのカフェハウスは知的文化的生活の中心となる場であった。例えば、ベートーベンの場合、彼はカフェハウス、オクセンミューレ<sup>lxxxi</sup>で牡牛のメヌエット<sup>lxxxii</sup>を作曲したらしい。このカフェハウスは新王宮前の練兵場広場に18世紀初頭に作られた。いずれにせよ、カフェハウス・オクセンミューレは王宮（ホーフブルク）でもあったが、政治的陰謀の牙城（ホーフブルク）でもあった。政治的であれ、芸術的であれ、革命へと至る全行程はカフェハウスの中で画策された。

19世紀初頭のイタリア革命的秘密結社の一つであるカルボナリ<sup>lxxxiii</sup>やリソルジメント<sup>lxxxiv</sup>の先駆者たちはマリアヒルファーシュトラッセに建つカーサ・ピッコラ<sup>lxxxv</sup>で会合を持った。この建物には1960年以降靴屋が入居している。

ウィーン三月革命の前年、1847年にカフェ・ナツィオナル<sup>lxxxvi</sup>が作られた。後に、カフェ・グリーンシュタイドル<sup>lxxxvii</sup>と名を変え、ウィーンの文化文芸のエリートた

ちの集う場として有名になった。このカフェが不満を抱える民主主義者や国粋主義者の集う場となるのに時間はかからなかった。

当時のメッテルニヒ政権の保守的な支持者たちはカフェ・ナツィオナル近くにあるカフエ・ダウム<sup>lxxxviii</sup>にたむろした。ダウムにしろ、ナツィオナルにしろ、これら2つのカフェハウスの客の中には常に相当のパーセンテージで秘密警察の情報部員が紛れ込んでいた。

一番人気のあったカフェハウスの一つである、カフエ・クラマー<sup>lxxxix</sup>は1720年にヤコブ・クラマーによって作られた。カフェハウスには伝統に則って、多種多様な新聞が並べられていた。当時はまだウィーンの新聞は数が少なく、クラマーはそれを補うために、多くのドイツの新聞や雑誌を取り揃えて顧客に便宜を図った。その結果、多くの大学教授がカフェに集ったので、カフエ・クラマーはやがて「ゲレールテス・カフェハウス」<sup>xc</sup>とニックネームで呼ばれるようになった。カフエ・クラマーにはまた多くの将来性のある文学者も集うこととなった。陸軍元帥であり、劇作家でもあるヘルマン・フォン・アイレンドルフ<sup>xcii</sup>、ウエルギリウス<sup>xciii</sup>著『アエネイス』<sup>xciii</sup>のあの有名なパロディを書いた風刺作家のアロイス・ブルマウアー<sup>xciv</sup>、ハイドン作曲『オーストリア第一共和国国歌』の作詞者である詩人のロレンツ・レオポルト・ハシュカ<sup>xcv</sup>、風刺作家ヨーゼフ・フランツ・フォン・ラチュキ<sup>xcvi</sup>、そして脚本家ヨハン・ラウテンシュトラオホ<sup>xcvii</sup>などである。若きゲオルク・フォルスター<sup>xcviii</sup>もここで学識者たちの議論に熱心に耳を傾け、後の大革命の心構えをした。彼は後にパリ国民会議のマインツ共和国外交使節団長となった。しかし同様に、警察の諜報員もウェイターや将校あるいは普通の客、それどころか作家になりすまして注意深く耳を傾けた。

イグナツ・ノイナー<sup>xcix</sup>は、プランケンガッセ<sup>c4</sup>番地とシュピーゲルガッセ<sup>ci</sup> 17番地を見晴らせる建物の中に、1808年ジルベルネ・カフェハウス<sup>cii</sup>を開業した。このような名前が付けられたのは、このカフェハウスのテーブルウェア、コーヒーポット、コート掛けのフックが銀製だったからである。この銀の華やかさはナポレオン時代後のウィーンのブルジョアの富の新たな象徴であった。カフェハウスには通常ビリヤード用、チェス用と2つの部屋があったが、このカフェには新たに女性のための3つ目の部屋が設けられた。それは、これまで滅多にカフェハウスに来ることのなかった女性もカフェハウスに足を運ぶようになったからである。

このカフェハウスには多くの有名作家がたむろした。その中でも、劇作家エドゥアルト・フォン・バウエルンフェルト<sup>ciii</sup>、ユーモア作家イグナツ・カステッリ<sup>civ</sup>、脚本家フェルディナント・ライムント<sup>cv</sup>とグリルパルツァー<sup>cvi</sup>、小説家アダルベルト・シュティフター<sup>cvii</sup>、そして詩人のニコラウス・レーナウ<sup>cviii</sup>がとりわけよく利用した。レーナウは12年もの間、ほとんど毎日このカフェハウスに姿を現した。彼は、キューを槍のように持って玉突きをしたが、ハスラーとしての腕前は一流であった。またベートーベンの手書き原稿には「グリルパルツァー君、ノイナーのところで、一刻も早く

君に会いたい」と書いてあるものがある。ジルベルネ・カフェハウスに姿を現したその他の音楽家には、ヨハン・ベッヒャー<sup>cix</sup>やフランツ・エヴァース<sup>cx</sup>、さらには、画家のヨーゼフ・ダンハウザー<sup>cxi</sup>や天文学者のヨーゼフ・ヨハン・フォン・リトロウ<sup>cxii</sup>がいた。ノイナー夫人はこのカフェハウスのキャッシャーをしていたが、この時代のリトグラフ<sup>cxiii</sup>には美しいノイナー夫人を取り囲む7人の取り巻きが描かれている。その中には、ライムント、ヨーゼフ・ランナー、そしてヨハン・シュトラウスがいた。

1825年にヨーゼフとアンナダウム夫妻に引き継がれ、カフェハウス・ダウム<sup>cxiv</sup>と名付けられたカフェは、夫妻の前の所有者のもとで、1769年以降人気の社交場となっていた。しかし、そこに集まる客たちが政治的に問題があるとされて1791年に警察によって一時的に閉鎖されることになった。<sup>20</sup> それでも、ダウム夫妻がこのカフェを引き継いで、カフェハウスは新たに評判になり、貴族や高級将校たちが利用するカフェとして有名になった。

シューベルトと彼の友人たちがたびたび訪れたのはカフェ・ボーグナーであった。カフェ・ボーグナーは同時代の画家モーリッツ・フォン・シュヴィント<sup>cxv</sup>、詩人であり哲学者でもあったエルンスト・フォイヒターズレーベン<sup>cxvi</sup>、そして作曲家フランツ・ラハナー<sup>cxvii</sup>の最良のカフェでもあった。

ウィーンの芸術家の有名な社交の場を引き継いだカフェには、アドルフ・ロース<sup>cxviii</sup>が建築したカフェ・ムゼウム<sup>cxix</sup>がある。カフェ・ムゼウムでは、フランツ・レハール<sup>cxx</sup>、アルバン・ベルク<sup>cxxi</sup>、エーリッヒ・コルンゴルト<sup>cxxii</sup>、オスカー・シュトラウス<sup>cxxiii</sup>が音楽家のテーブルに着いた。そしてオスカー・ココシュカ<sup>cxxiv</sup>、グスタフ・クリムト<sup>cxxiv</sup>、エゴン・シーレ<sup>cxxvi</sup>は画家のテーブルに、フランツ・ブライ<sup>cxxvii</sup>、オスカー・マウルス・フォンタナ<sup>cxxviii</sup>、ロベルト・ムジル<sup>cxxix</sup>は作家のテーブルに着いた。

ウィーンのソクラテスと言われたペーター・アルテンベルク<sup>cxix</sup>にはたった一つのお気に入りのカフェハウスがあり、彼はそこでほとんどの時間を過ごした。キュルシュナーズ・ゲレールテン・カレンダー<sup>cxix</sup>、これは当時の学者の伝記及び文献目録が掲載されているドイツ百科全書であるが、その中で彼は自分の住所をカフェ・ツェントラル<sup>cxix</sup>、ウィーン1区としていた。<sup>21</sup>

ヘルマン・ケステン<sup>cxix</sup>はウィーンのカフェハウスの意義を次のように記している。

「私は人生の大半をカフェハウスで過ごしたことを全く後悔していない。カフェハウスは詩的靈感を待ち望むところ・・・心が浮き浮きする時、古い手帳と鉛筆を1本鞆から取り出し、そして書き始める。私は周りのすべてを忘れる、ケルナー、他の客、そして私自身をも。カフェハウスは私のパルナツソス山となり、私は豎琴を弾くアポロとなる」。<sup>22</sup>

## 監修者あとがき

私たち小さなグループはウィーンに憧れて、数年前から古い帝都の歴史と文化を勉強するようになりました。当初どちらかと言えば社交的な性格のものでしたが、時間が経つにつれて、次第にこの古い町ウィーンを本格的に学ぶ研究の旅へと発展していきました。私たちは、個々の建物、広場、公園を訪れ、それぞれの由来、その時代時代にそれぞれが果たした役割、それぞれの最終的な行く末を学びました。そのような定めは戦争と戦後の混乱と恐怖の内に突然閉じられることになるのでした。

それから私たちの関心はもっぱら音楽の都としてのウィーンへと移り、その中でも、ランナー、シュトラウス父子、ツィーラーそしてレハール等が生み出したワルツの由来へと向けられました。

そして音楽の後にはついに、今なおウィーンとは切り離すことのできない関係にある施設に私たちはたどり着きました。それは言うまでもなく、ウィーンのカフェハウスのことです。ウィーンのカフェハウスが果たす社会的、文化的、政治的、知的な機能はどれほど高く評価しても評価しきれないのです。このような関連の中で、「ウィーンのカフェハウス」というテーマを持つ新しい学術論文を翻訳し、多くの読者の目に触れてもらいたいという考えが私たちの間に生まれました。

翻訳のために選ばれたのは、米国の作家ヘルバート・レーデラーの論稿です。というのも、彼のユダヤの家系自身がウィーンの運命と密接に結びついているからであり、しかも、彼はカフェハウスの怪しげな始まりから19世紀の最盛期に至るまでの展開を短いスペースの中で見事に跡付けているからなのです。

この翻訳には、ウィーン大学名誉教授ギンター・ペルトナー氏が素晴らしい序言を添えて下さいました。心より感謝申し上げます。そしてこの翻訳をした後には、過去への魅惑的な旅の思い出が残り、さらには、私たちがこの翻訳とこのテーマに取り組んだ際の喜びが、他の若い人々にもウィーンとハプスブルク帝国の歴史の研究に取り組むきっかけになってくれればという希望が生まれています。

2017年9月  
ペピン ハンス ヨアヒム

## 原注

- 1 Ludwig Plakolb, ed., Kaffeehaus (Munich 1959), p. 70.
- 2 *ibid.*
- 3 Hermann Kesten, Dichter im Kaffee, Vienna/Munich/Basel 1959), p. 361.
- 4 Ludwig Plakolb, Kaffeehaus, p. 71.
- 5 Quoted in William A. Ukers, All about Coffee (New York, Tea and Coffee Trade Journal Co., 1935), p. 20.
- 6 Phillip Silvester Dufour, Traites nouveaux et curieux du Café, du Thé et du Chocolate. Ouvrage également necessaire aux Medecins. & a tous ceux qui aiment leur santé (sic) (The Hague, 1693) not available to this study.
- 7 William A. Ukers, All about Coffee, p. 733.
- 8 William A. Ukers, All about Coffee, p. 23.
- 9 William A. Ukers, All about Coffee, p. 33.
- 10 Quoted in William A. Ukers, All about Coffee, p. 39
- 11 William A. Ukers, All about Coffee, p. 674.
- 12 Carl von Peez, „Kolschitzky“, in Alois Trost, Alt-Wiener Kalender (Vienna 1918), p. 1-81.
- 13 William A. Ukers, All about Coffee, p. 48.
- 14 Ludwig Plakolb, ed., Kaffeehaus, p. 70.
- 15 William A. Ukers, All about Coffee, p. 48.
- 16 Ludwig Plakolb, ed., Kaffeehaus, p. 70.
- 17 Marcel Brion, Daily Life in the Vienna of Mozart and Schubert. Translated George Weidenfeld (London 1961), p. 48.
- 18 Marcel Brion, Daily Life in the Vienna of Mozart and Schubert, p. 50.
- 19 Quoted in Marcel Brion, Daily Life in the Vienna of Mozart and Schubert, p. 51.
- 20 Richard Groner, Wien wie es war (Vienna/Munich 1965), p. 113.
- 21 Hermann Kesten, Dichter im Café, p. 74.
- 22 Hermann Kesten, Dichter im Café, p. 7.

## 訳注

- i Ludwig Plakolb.作家、編集者。
- ii Marcel Brion (1895-1984).フランスの長編小説家、エッセイスト、芸術評論家。アカデミー・フランセーズ会員。
- iii Kelner. ウェイター。
- iv Herr Direktor.「社長さん」の意。
- v Herr Doktor.「博士さん」の意。
- vi Herr Professor.「教授先生」の意。
- vii Herr Baron.「男爵様」の意。
- viii Einspänner.
- ix Melange.
- x Mokka.
- xi Kapuziner.
- xii Eine Schale Gold.
- xiii Eine Tasse Nussbraun.
- xiv Schlag. ホイップクリーム。
- xv Stammkaffee. お気に入りのカフェハウス。
- xvi Semmel.
- xvii Kipferl
- xviii Jause.
- xix Torte.
- xx Feuilletons. 新聞、雑誌などに掲載されている文芸欄のこと。多くの文学、演劇、映画などの紹介や評価、時には風刺画などが書かれたコラム。
- xxi Kaffa.
- xxii Bunn.
- xxiii ラテン語でRhazesまたはRasisと表記される。ペルシャの重要な医者、自然科学者、哲学者、錬金術師。
- xxiv Galenos von Pergamon. 西暦129年もしくは131年ペルガモン生、200年もしくは215年没（ローマ）。ギリシャの医者、解剖学者。
- xxv 原文のまま。正しくは900年頃のこと。
- xxvi Al-Haiwi. 医学大辞典
- xxvii Süleyman I. 1494年生1566年没（ハンガリー）。オスマン帝国第10代皇帝。1520年から1566年の長期にわたる在位の中でオスマン帝国を最盛期に導いた。
- xxviii 原文のまま。1554年という説もあるし、1555年まではコンスタンチノーブルにカフェハウスは存在しなかったという説もある。
- xxix Leonhard Rauwolf (1535-1596).

- xxx *Eigentliche Beschreibung der Raisz so er vor dieser Zeit gegen Auffgang in die Morgenländer vollbracht.* (Launing 1582) . 英訳のタイトルは*Dr. Leonhard Raufolf's Travel into the Eastern Countries (1693)*.
- xxxix CHAUBE.
- xxxixii Phillip Silvester Dufour, *Traites nouveaux et curieux du Café, du Thé et du Chocolate*.
- xxxixiii Gianfrancesco Morosini (1537-1596) .イタリアの枢機卿。
- xxxixiv Cavee.
- xxxixv Pietro Della Valle (1586-1652) .イタリアの学術調査探検家。
- xxxixvi Carlo Goldoni (1707-1793) .ベネチアの劇作家、リブレット作家。代表作に『珈琲店』(1750)、『宿屋の女主人』(1753) など。
- xxxixvii Florian.ベネチア、サンマルコ広場に1720年に創業された。ベネチアに現存する最も古いカフェ。
- xxxixviii Pieter van den Broecke (1585-1640) .オランダの将校で、商人。
- xxxixix Adriaen van Ostade (1610-1685) .オランダ黄金時代のフランドルの画家。
- xl Pierre de la Roque(年代不詳).フランスマルセーユの商人。1644年コーヒーをマルセーユに紹介した。
- xli John Smith (1580-1631) .イギリスの軍人、植民請負人、船乗り、作家。ヴァージニア植民地の指導者。
- xlii 原文では*Travels and Adventure 【Adventures ?】* となっているが、これが、*The True Travels, Adventures and Observations of Captain John Smith* のことであるとすると、他の参考資料を見ると、1630年出版となっている。
- xliiii Coffa.
- xliv Francis Bacon (1561-1626) .イギリスの哲学者、神学者、法学者、子爵。著書は*Sylvia Sylvarum* など。
- xlvi Samuel Pepys. (1633-1703年) .17世紀に活躍したイギリスの官僚。1660年から1669年にかけて書いた詳細な日記で知られている。海軍再建に手腕を発揮。イギリス海軍の父と呼ばれている。
- xlvi Thomas St Serf (Thomas Sydsurfとも書かれる。1624年-1669年) .17世紀スコットランドの劇作家。
- xlvi 初演は1667年、ロンドン。3幕目にコーヒーハウスのシーンが出てくる。
- xlix Carl von Peez (1858-1919) .
- l Georg Franz Kolschitzky.
- li Kulczycki.
- lii Graf Ernst Rüdiger von Starhemberg (1638-1701) .オーストリアの貴族、



- 軍人。第二次ウィーン包囲時の防衛司令官としてオーストリアの勝利に貢献した。
- liii Jan Sobieski=Jan III, Sobieski (1629-1696).ポーランド王としての在位は1674年から1696年。第二次ウィーン包囲で勝利し、英雄として名をはせた。
  - liv Demetrius Domasy.
  - lv St. Stephansdom.
  - lvi *Auf der Heide*. (「ヒースの上で」の意)
  - lvii *Domgasse*.
  - lviii *Kleine Schüler Straße*.
  - lix *Zum Roten Kreuz*. (「赤い十字架亭で」の意)
  - lx *Die Blaue Flasche*. (「ブルーボトル」の意)
  - lxi *Schlossergasse*.
  - lxii *Stock-im-Eisen Platz 8*. 番地を4.とする資料もある。建物は1860年代に隣家と共に取り壊された。
  - lxiii St. Stephans Friedhof. シュテファン教会に属するこの墓地は1170年以前に開設され、1732年に閉鎖された。
  - lxiv *Kolschitzkygasse*.
  - lxv *Favoritenstraße*.
  - lxvi Pauline Clementine Marie Walburg Fürstin von Metternich – Winneburg zu Beilstein (1836-1921) .
  - lxvii Café Hugelmann.
  - lxviii 当時はSchlagbrückeと呼ばれていた。現在のSchwedenbrücke。
  - lxix Prater.元は宮廷狩場。1776年、ヨーゼフ2世によって民間に開放された。現在は遊園地となっている。
  - lxx Augarten Café.
  - lxxi Paradiesgarterl.
  - lxxii Pietro Corti.
  - lxxiii Burg Theater.
  - lxxiv Stadtpark Café.
  - lxxv Café Weghuber.
  - lxxvi Ferdinand Raimund (1790-1836) .オーストリアの劇作家、演出家、民衆劇の最盛期を築く。
  - lxxvii Mariahilferstraße.
  - lxxviii Café Schwender.
  - lxxix Prinzessin Pereira-Arnstein (Henriette Freifrau von Pereira-Arnstein) (1780-1859) .  
ウィーンのピアニスト。母のサロンを受け継ぎ、文芸作家、音楽家のパト

ロンとなった。

- lxxx tableaux vivant. 18世紀末に起こった娯楽形態の一つ。絵画や彫刻の作品を役者や芸術家が扮装し、絵画のようなポーズをとって情景を作る芸術手法。
- lxxxix Ochsenmühle. 「牡牛の水車小屋」の意。レモネードスタンドから始まり、後にKaffeehaus Corti、現在はVolksgarten Clubdiscoとなっている。
- lxxxii 残念ながら、訳者が調べた限りでは、ベートーベンには「牡牛のメヌエット」という作品はない。原著者はベートーベンのメヌエットの1つに「牡牛のメヌエット」があったと考えている。
- lxxxiii Die Carbonari. 炭焼人（伊）の意。19世紀初頭イタリアで設立された重要な秘密結社。イタリア統一と封建制度の打倒を目指す。
- lxxxiv Das Risorgiment. 19世紀に起きたイタリア統一目的の政治的社会的運動。
- lxxxv Casa Piccola. 「小さい家」の意。
- lxxxvi Café National. 1847年、薬剤師ハインリッヒ・グリーンシュタイドルによって設立される。顧客にはフランツ・グリルパルツァー、フーゴー・フォン・ホフマンスタール、アルトゥール・シュニッツラーなど、多くの文士がいた。
- lxxxvii Café Griensteidl. 1010 Wien Michaelerplatz 2。1990年、閉鎖されていたカフェが再開されるが、2017年6月再度閉鎖される。
- lxxxviii Café Daum. 1829年、Café Milaniから始まり、後、Café Daumとなる。1880年閉店される。
- lxxxix Café Kramer. 1719年設立とも言われている。ウィーンで最初の有名文士カフェ。Schlossergasseにあった。
- xc Gelehrtes Kaffeehaus. 「学識者のカフェハウス」の意。
- xcii Hermann von Ayrendorf.
- xciii Vergil. Publius Vergilius Maro（紀元前70年～紀元前19年）。ラテン語詩人。ラテン文学黄金期を築く。主な作品に『牧歌』、『農耕詩』、『アエネイス』がある。ラテン文学史上最も重要な人物。
- xciv 12巻からなる叙事詩。ウェルギリウスの最高傑作であり、西洋文学史上、最も重要な詩作品の一つと考えられている。
- xcv Alois Blumauer.
- xci Lorenz Leopold Haschka.
- xcvi Josef Franz von Ratschky.
- xcvii Johann Rautenstrauch.
- xcviii Georg Forster. Johann Georg Adam Forster（1754-1794）。ポーランド、ドイツの博物学・民俗学者、旅行家、ジャーナリスト、革命家。ジェームズ・クックの2度目の太平洋航海に参加する。イギリス王立協会会員。マ

- インツ大学教授。ドイツ啓蒙思想の中心人物。パリで病死。
- xcix Ignaz Neuner. 伝説的cafetier.
    - c Plankengasse. ウィーン1区。
    - ci Spiegelgasse. ウィーン1区。
    - cii Silberne Kaffeehaus. 「銀のカフェハウス」の意。
    - ciii Eduard von Bauernfeld (1802-1890) . ウィーンの劇作家。
    - civ Ignaz Caslelli. Ignaz Vinzenz Franz Castelli (1781-1862) . オーストリアの詩人、劇作家。作品には多くのコメディがある。
    - cv Ferdinand Raimund. Ferdinand Jakob Faimund (1790-1836) . オーストリアの俳優、劇作家。
    - cvi Franz Seraphicus Grillparzer (1791-1872). 代表的作品に『スパルタクス』、『アルフレッド大王』、『ウィーンの辻音楽師』など多数。
    - cvii Adalbert Stifter (1805-1868) . オーストリアの小説家、画家、教育学者。ビーダーマイアー時代の重要な作家。代表作品に『習作集』、『短編集』、『石様々』、『晩夏』など。
    - cviii Nicoraus Fanz Niembsch Edler von Strehlenau (1802-1850). 代表作に『葦の歌』、『森の歌』、『ファウスト』など。ベートーベンを崇拝する。レーナウの詩は多くの作曲家に創作のインスピレーションを与えた。
    - cix Johann Becher.Franz Evers.共に訳者が調べた限り音楽家に彼らの名はない。
    - cx Franz Evers (1871-1947) . 書籍商、後に編集者。月刊誌Literalische Blätterの編集者、他に名詩選集Symphonie, Deutsche Liederなどの編集者として彼の名はある。
    - cxii Josef Franz Dannhauser (1805-1845) . ビーダーマイアー時代のオーストリアの画家、グラフィック・アーティスト。作品多数。
    - cxiii Josef Johann von Littrow (1781-1840) . オーストリアの大学天文台の発起人。月などには彼の名に因んだクレーターがある。1972年のアポロ17計画で2人の宇宙飛行士がリトロウ・クレーターの近くに降りた。
    - cxiiii 1871年、Vinzenz Katzler作、” Die Kassierin vom silbernen Kaffeehaus “.
    - cxv Kaffeehaus Daum.
    - cxvi Moritz Ludwig von Schwind (1804-1871) .オーストリアの画家、後期ロマン派のデザイナー。シューベルト作曲歌曲『魔王』の挿絵を描く。
    - cxvii Ernst Maria Johann Karl Freiherr von Feuchtersleben (1806-1849). オーストリアで人気のあった哲学者、医者、詩人、エッセイスト。ウィーン10区に彼の名に因んだ通りがある。
    - cxviii Franz Lachner (1803-1890) . ドイツの作曲家、指揮者。シューベルト、シュヴァント、ベートーベンと親交があった。

- cxviii Adolf Loos (1870-1933) . 20世紀を代表するオーストリアの建築家。代表作にカフェ・ムゼウム、アメリカン・バー、ロース・ハウスなど。ウィーン分離派やウィーン工房の装飾性を批判。建築界に波紋を呼んだ。
- cxix Café Museum.
- cxx Franz Lehár (1870-1948) . オーストリア、ドイツを中心に活躍したオペレッタ作曲家。代表作に『メリー・ウイドウ』、『ウィーンの女たち』、『微笑の国』、ワルツ『金と銀』等。
- cxxi Alban Maria Johannes Berg (1885-1935) . オーストリアの作曲家。シェーンベルクに師事。12音技法による作品を残す。代表作に歌曲、ピアノソナタ、弦楽四重奏曲、オペラ『ヴォツェック』等。
- cxxii Erich Wolfgang Korngold (1897-1957) , オーストリア、アメリカで活躍したユダヤ系作曲家。アメリカ亡命後映画音楽で活躍。他にシンフォニー、ヴァイオリン・コンツェルト、チェロ・コンツェルト、左手のためのピアノ・コンツェルト等。
- cxixiii Oskar Strauss (Oscar Straus) (1870-1954) . ユダヤ系のオペレッタ作曲家。バレエ音楽、映画音楽等、作品多数。
- cxixiv Oskar Kokoschka (1886-1980) . 20世紀オーストリアを代表する画家。当時の芸術運動には参加せず、独自の道を歩む。代表作に『アルマ・マラーの肖像』、『風の花嫁』等。
- cxixv Gustav Klimt (1862-1918) . 保守的なキュンストラーハウスを嫌い、ウィーン分離派を結成。初代会長。モダンデザインの成立に重要な役割を果たす。黄金の時代の作品には金箔が多用されている。代表作に『接吻』、『ユーディット』、『ダナエ』、『ベートーベン・フリーズ』等多数。
- cxixvi Egon Schiele (1890-1918) . 倫理的に問題視される描写も作品に用いる。クリムトはシエレを全面的に援助する。その作風により警察に拘留される。病死。代表作に『死と乙女』、『裸体の女』、『自画像』。ゴッホの『ひまわり』を称賛。自らも同じ構図のひまわりを作品として残している。
- cxixvii Franz Blei (1871-1942) . 小説家、翻訳家、編集者、文芸評論家。1959年、彼の名に因んだ通りがウィーン10区に作られる。
- cxixviii Oskar Maurus Fontana (1889-1916) . オーストリアの小説家、劇作家、詩人、劇評論家、ジャーナリスト。
- cxixix Robert Musil (1880-1942) . オーストリアの小説家。ベルリン大学で博士号取得。唯一の長編大作『特性のない男』により名声を得るが、未完である。1938年、スイスに亡命。この作品の完成に心血を注ぐも、1942年、急死。他の作品に『士官候補生テルレスの惑い』、戯曲『夢想家たち』、『三人の女』等。
- cxixxx Peter Altenberg. 本名Richard Engländer (1859-1919) . カフェ文士とし

て知られるオーストリアの作家、詩人。建築家アドルフ・ロースとは親友。代表作に『私の見るままに』がある。

- cxxxix Kürschners Gelehrtenkalender. ドイツ学者年鑑。
- cxxxii Café Central 1010 Wien, Herrengasse / Ecke Strauchgasse. 1876年開業のウィーンを代表する有名老舗文士カフェの一つ。
- cxxxiii Hermann Kesten (1900-1996) . ドイツの小説家。他に脚本、詩、エッセイなどがある。主な作品に『正義』、『ゲルニカの子供たち』、『ニュルンベルクの双子』など。

この翻訳の作成にあたっては柴山美保子、能田豊、濱田英子、早川絢子、梶形典子、山崎春己の協力を得た。記して感謝を述べる。

### **Abstract**

It is well known that the Vienna coffeehouse has preserved its function as a center of cultural life up to the present time. Well known is also the fact that the history of the coffeehouse starts somewhere in the 17th century. What has remained largely in the dark, especially for Japanese readers due to the lack of translations of important historical material, is the complicated, twisted yet always amazing development of the coffeehouse into a veritable institution of life in Vienna.

Thanks to an instructive article by Herbert Lederer we now have for the first time a concise source-based documentation of the way in which developments took place. After tracing the origins of both the plant and of the word, the author shows the importance of coffee as a drink in every-day Arab culture from where it was introduced to Europe, in particular Italy and England, long before the Siege of Vienna in 1683. Yet astonishingly, it was in Vienna that “coffee” took hold. Here, as the author lays out, a development was set in motion whereby coffee became not only a new and easily accessible beverage but the elixir around which a new life style began to flourish culminating finally in the establishment of “the Vienna coffeehouse” of the 19th century, the cultural importance of which simply cannot be overestimated.